

## 神戸市就学・教育支援委員会 第2回視覚障害教育部会

### 議事要旨

1 開催日時 令和5年12月22日（金）15時～17時

2 開催場所 神戸市総合教育センター601号室

3 出席委員 岡崎部会員、鈴木部会員、高田部会員、中西部会員、山本部会員  
オブザーバー 小澤課長、川畑課長、乗松班長、古本校長

### 4 議事

(1) 視察報告(「視覚障害児が通う大阪府の公立小学校」及び「東京都立久我山青光学園」)  
・色々な学校を見ると、それぞれ文化が違うため思わぬ発見があつておもしろい。神戸市らしい案で、豊かなアイデアを考えるのもよいと思う。

・視察した大阪府の公立小学校に通う児童は、のびのびとした様子で、クラスで受け入れられていた。入学当初から学校全体で本児と関わっているため、特別な対応と捉えておらず、日常の様子であった。

・大阪府の公立小学校は、地域校のインクルーシブな環境で児童を受け入れるために、施設やハード面等でしっかりと準備をされている。視覚障害児の受け入れによって、教員やまわりの児童の意識も変化しているようであるが、視覚障害教育はしっかりと保証されているのか。

・定期的に視覚特別支援学校の教員が訪問している。職員に対する研修を経て、視覚障害のある児童への教育に活かされていると、視察先の学校から聞いている。

・インクルーシブの観点では、大阪府の公立小学校の取り組みが理念にあっていると思うが、長い目で見たときにどちらのほうが子どもの力を伸ばせるのか、成果があるのかということもある。

・社会の中で自立するため他の方と一緒に過ごす能力を養うのか、あるいは、個人の能力を深めていくのかなど、最終的なゴールをどこに設定するのかにもよる。

・大阪府の公立小学校の視察では、視覚障害のある児童は通常の学級で授業を受けていたが、授業についていくことができているかという点においては疑問に思った。児童の最終的なゴールは分からないが、今は通常の学級と一緒に学ぶことを選択しているのだと思う。

・東京都立久我山青光学園は、子どもの特性上、視覚障害教育と知的障害教育の教育課程を分けたほうがしっかりとした教育ができるという理念であった。授業を参観したが、集団での学びのなかで、専門性の高い、丁寧な教育をされていて、子どもたちが安心して学んでいる様子であった。

### (2) 「神戸市立盲学校の学科について」

・神戸市には、市立盲学校と県立視覚特別支援学校があり、設置学部・学科も同じである。そのような神戸市の環境を利用して、様々な選択肢を増やしていくことが大事だと思う。

・選択肢を増やした場合に、専門的な知識・経験のある教員の確保や、次世代の人材育成をどうするのか。また、同じ障害のある子ども同士のつながりや、保護者が気持ちを共感し、共有するネットワークの構築など課題もある。

・盲学校の機能や、専門性のある教員をどう活かしていくのかを考えながら、あり方を考えていくべきだと思う。

・大学には視覚障害のある学生も在籍しているが、普通に学生生活を過ごしている。学習においてはITが役に立っており、視覚障害のある学生と教授とのあいだにパソコンがあることで、違和感なくやり取りができる。視覚障害のある方については、アカデミック性が高いほど垣根がないという印象を受けている。

・視覚特別支援学校で早い年齢からITを使うことができれば、他校とのやり取りや、同年代の子どもたちとの交流もスムーズにできると思う。

・視覚障害教育は、盲学校でしかできないことがまだまだある。地域校には課題がたくさんあると思うため、十分な支援が必要である。

・以前は視覚特別支援学校に在籍する児童生徒数が多かったが、少なくなってきて、大変だと思う。

・これからは、盲学校への進学だけでなく、色々な選択肢を考えていくべきであると思う。ただ、選択肢によっては親同士のつながりがなくなることや、背伸びをしてつぶれてしまうことも考えられるため、しっかりと考えていくべきだと思う。

・少子化の影響や、医学の進歩によって、視覚障害のある子どもの数は減少しているが、医学ではどうすることもできない難しい疾病が一定程度残り続ける。

・市立盲学校は単一障害の児童生徒が多いようであるが、他の障害と視覚障害を併せ有する方も一定の割合でいらっしゃるため、重複障害の方へも手厚くサポートしていくべきである。

・視察を通じて、地域に受け入れられて一緒に過ごすことはとてもよいと思うが、盲学校の必要性や、視覚障害教育の専門性の大切さを改めて感じた。保護者として、子どもへの合理的配慮と専門性について何ができるのか考えていくなかで、保護者との情報共有の場としても、盲学校の必要性を感じた。

・幼稚園の入園前においても、視覚障害のある幼児の保護者から、地域の幼稚園に通ってみたいという声を聞くことがある。そのような場合は、保健師が保護者に同行して、実際に幼稚園を見学して様子を見に行っている。

・子どもや保護者の選択肢が増えることは良いことだと思う。専門性をどう補っていくのかということもあるが、各関係機関が連携しながら、保護者や子どもにとって一番良い方法について一緒に考えていきたい。

・聴覚障害のある幼児の場合は、地域の園に通いながら療育センターにも通う、並行通園を利用されている。視覚障害でもそのような仕組みをつくっていく必要があると思う。

・地域の保健師は早期に子どもの状態を把握できるため、関係機関が早い段階からつながり

を持てるよう、ネットワークの在り方も見直していく必要がある。